

## 夜神楽の季節

著者	黒田 一充
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	64
ページ	2-3
発行年	2012-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00023886">http://hdl.handle.net/10112/00023886</a>

## 夜神楽の季節

黒田 一 充

稔りの秋になると、豊作を神に感謝するために祭りがおこなわれる。秋祭りは9月下旬から11月初旬にかけておこなわれ、出雲に神々が集うという旧暦の神無月をはさんで、冬祭りの季節に入る。旧暦霜月の祭りでは、収穫の感謝とともに、村人の親睦も兼ねて神楽が奉納される。霜月祭に奉納されるため、霜月神楽とよばれるが、新暦になった現在では、11月下旬から2月下旬にかけておこなわれるようになっている。

神楽は当番の個人宅を神楽宿とし、屋内に神庭にわを設けておこなわれていたが、神社の境内や村の集会所などに変わり、日程も観光客向けの短縮版や、日神楽と違って昼間や遅くなっても夜半までに終わるところが多くなっている。しかし、夕方から朝まで夜通しで神楽が舞われるのが、本来の姿であった。

舞手も見物人も、厳しい寒さと睡魔に耐えながら長い夜を過ごすのだが、夜明けのころに合わせて、人気のある演目が奉納される。鳥根県の出雲や石見神楽では、八岐大蛇やまたのおろちが登場して素戔嗚尊すさのおのりことが退治する舞が演じられる（写真1）。



写真1 石見神楽の「大蛇」(有福温泉神楽団・2011年撮影)

宮崎県の神楽では、天の岩戸いわのどに籠った天照大神あまのうずめのみことを誘い出すために、天鈿女命あまのうずめのみことが岩戸の前で舞い、続けて外の様子をうかがうために隙間が空いた岩戸いからのおのみを手力雄神たぢりおのりが放り投げる舞いが演じられる。日の神の出現と実際の夜明けの時間を重ねることによって、太陽の光の恵みを実感す

るように演出されている。



写真2 高千穂神楽の「手力雄」(高千穂町上野地区・下組・2011年撮影)

通しで見ることで、理解できる演出もある。岩戸の様子を探る手力雄神の神面(写真2)と、岩戸を放り投げる際の神面が、鈿女の舞をはさんで白色から赤色に変わっている。顔を真っ赤にするほど全身の力をこめて、岩戸を開けていることを端的に表現している（写真3）。



写真3 高千穂神楽の「戸開」

地域によって異なる演出もある。宮崎県北部の高千穂神楽では、天照大神の神像を祀った小祠の前に岩戸を置くのに対し、県南部の銀鏡神楽では、屏風を岩戸に見立て、その中に女面を着けた少年が天照大神に扮して座す。岩戸を開くのも、手力雄神ではなく、戸破明神とらやになっている（写真4）。この二つの地域は、外注連とらやや外神屋とよばれる屋外の祭壇の供え物も異なり、高千穂が糶種とらやを入れた俵なのに対し、銀鏡

では祭りの期間に獲れた猪の頭を並べる（写真5）。肉は調理して、猪狩りの様子を見せる演目の「シシトギリ」が終わると、参加者に振る舞われる。



写真4 銀鏡神楽の「戸破明神」(西都市銀鏡・2008年撮影)



写真5 銀鏡神社大祭に献納された猪の頭

神楽の内容は、祈願や浄めの舞、神話の中の話のほかに氏神などの土地の神々も登場する。土地の神が現われると、問答がおこなわれることが多い。

高千穂町上野地区では、未明に演じられる「地割」という演目で、荒神が登場する。竈のある神楽宿の台所で祓いの神事をおこなった後に、神楽が演じられる神庭に現れるが、その際、荒神の裾を女性たちが引っ張る所作がみられる。そして舞が終わると、荒神が初俵の上に腰掛けて神主と問答をする（写真6）。問答によって怒りを鎮めた荒神は、家の守護神となって神主に矢と杖を授け、神主は神酒を献上する。

長野と愛知・静岡の県境地域でも、霜月神楽は盛んにおこなわれている。とくに、奥三河の愛知県東栄町や豊根村の花祭が有名である。ここでは、当番の家を花宿とよび、その土間に竈まいたを設けて大釜で湯を沸かし、その横を舞庭として、子どもたちの「花の舞」から順に年齢ごと



写真6 高千穂神楽の「地割」：荒神と神主の問答

に異なる舞が奉納される。花祭では、夜中に鬼が登場する。山見鬼・榊鬼が順に登場し、夜が明けると竈で焚いた湯を見物人たちに振りまく湯ばやしがおこなわれて、茂吉鬼（朝鬼）が登場する。これらの鬼の中で、榊鬼が禰宜と問答をし、山の神であることを名乗る（写真7）。

神楽の演目の中で問答がともなうのは特別なものであり、氏神や荒神、鬼などその姿は異なるが、いずれも土地の神が神楽宿を訪れることによって、その家の繁栄を祝うためにおこなう特別な演目なのである。



写真7 花祭の禰宜と問答をする榊鬼(東栄町布川・2008年撮影)

このように、古くから伝えられてきた神楽も、後継者難の問題があり、花祭は東京など他所の人びとの応援で維持されているところもある。高千穂町上野地区では、5歳の男児から舞いの練習を始めるそうだが、昨年学生たちと訪れた際には、夜中にもかかわらず、演目の合間に4歳の男の子が大太鼓を立派に叩いていた。伝統の継承がうまく続いていることを感じた。

文学部教授